

# オスカー・ワイルド文学における原点としての童話 ——芸術至上主義と宗教意識の相克

宮本 裕司

## 1. はじめに

本稿は、オスカー・ワイルドの童話が、ワイルド文学における原点としての特徴を備えていることを探究する試論である。童話という文学ジャンルとして見た場合、ワイルドの童話は芸術至上主義<sup>1</sup>と宗教意識が相克しているという特異性を帯びている。そして、その特異性がのちの作品に組み込まれていき、ワイルド文学総体の特徴を形作っていると筆者は考える。これまで、ワイルド文学を唯美主義文学としての観点や、キリスト教文学としての観点で研究したものはあったが、芸術至上主義と宗教意識の両方に焦点を当て、その濃淡が作品ごとに変化していったことを本格的に論じたものは未見である。

## 2. 先行研究

*De Profundis* (1905) 以前のワイルド文学は異教趣味が前面に出て、キリスト教が付随物だったが、*De Profundis* 以降はキリスト教が前面に出ていると池田正義は指摘している<sup>2</sup>。しかし、異教趣味をギリシャ的な芸術至上主義と考えた場合、異教趣味(ヘレニズム=芸術至上主義)とキリスト教(ヘブライズム=宗教意識)という二つの思想の相克はワイルド文学を貫くテーマであり、その相克が最初に表出し、宗教意識が芸術至上主義の前面に出たのは*De Profundis*ではなく、童話であると筆者は見ている。ワイルド文学の初期作品である童話と晩年の書簡である*De Profundis*がキリスト教文学として、*The Picture of Dorian Gray* (1891)や*Salomé* (1893)な

どの代表作が唯美主義文学として研究されることが多かった。芸術至上主義と宗教意識は、ワイルド文学を通して共存・混在し、描写の濃淡を変えながらも、いずれかが前面に出ようと相克していたと筆者は考える。本稿における「濃淡」とは、芸術至上主義と宗教意識の、どちらの要素を備えた描写がより前面に出ているかを指している。芸術至上主義的描写は、*The Picture of Dorian Gray*のように、芸術は人生や愛よりも重要であるとするものである。一方、宗教的描写は、“The Happy Prince”(1888)や“The Selfish Giant”(1888)のような神による救済や秘跡である。ワイルド文学は書かれた時代によって、作品の芸術至上主義色と宗教色は濃淡が変化しているのである。また、“The Happy Prince”は、回心や救済についての宗教的描写が濃いものの、エロティックで同性愛を想起させる芸術至上主義的な描写がある。すなわち、芸術至上主義と宗教意識の描写は、同じ作品の中でも濃淡を変えている。

芸術至上主義と宗教意識という観点とは若干異なるが、愛他精神とデカダンスという両極端な内容がワイルドの童話に共存・混在していることについて、富士川義之は以下のように発言している。

そこにはさまざまな対立物をことさらに融和させることもなく、矛盾は矛盾のままに、ほとんどいびつと言ってもよいが大層華やかな形で複合的に表出するワイルド文学に二面性が認められるのではあるまいか。(富士川 36-37)

私見によれば、愛他精神とデカダンスという思想は、それぞれヘブライズム・宗教意識と、ヘレニズム・芸術至上主義という大きな思想に包含されると考えることができる。概して、ワイルドの童話は、芸術至上主義よりも宗教意識の色合いが濃い、同じ作品の中でもこの二つの思想は描写の濃淡を変えて相克している。

キリスト教文学の定義を論じる場合、キリスト教徒が書いたものかどうかという主体論の立場と、キリスト教的題材を用いているかどうかという素材論の立場で区別する考え方がある<sup>3</sup>。欧米はキリスト教文化圏であるため、全ての文学がキリスト教文学であるという見解があるが<sup>4</sup>、日本の

ようにキリスト教徒が主流でない国においては、主体論の立場から考えることは困難である。その理由は、非キリスト教徒がキリスト教を題材とした文学もあれば、キリスト教を棄教した作家が書いている文学もあるためである。兒玉實英は素材論の立場から、キリスト教と文学のかかわりを以下の4つの類型の中で分類しており、ワイルド文学の相克を検証する参考になるため、本稿は兒玉の提示する類型に依拠する(兒玉 114)。

1. 聖書の題材を用い、宗教的感動をともなう作品
2. 聖書の題材を用いるが、宗教的感動をともなわない作品
3. 世俗的題材を扱うが、宗教的感動をともなう作品
4. 世俗的題材を扱い、宗教的感動をともなわない作品

兒玉の定義によれば、「宗教的感動」とは、改心、新生、信徒の交わりと恋愛、別れ、隣人愛、祈り、啓示、迫害、罪の許し、などに伴う宗教的感情に起因する感動である。1はジョン・ミルトン(John Milton, 1608-1674)の*Paradise Lost*(1667)や湯浅半月の『十二の石塚』(1885)、2はワイルドの*Salomé*、3はチャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-1870)の*Christmas Carol*(1843)やワイルドの“The Happy Prince”、4はほとんどの文学作品がこれに属すと兒玉は例示している。兒玉はこの4類型のうち、ヘブライズムを中心テーマとする「キリスト教文学」は1と3であると論じている。さらに兒玉は、「ふしぎなことに、『サロメ』を書いたワイルドも、この分野に属す『幸福な王子』などを書いている」(兒玉 114)と発言している。同じ作家が2と3の両方を書くというのは、兒玉には奇異に思われたのであろう。この発言は、ワイルド文学の備える二面性を端的に表している。芸術至上主義と宗教意識の葛藤があったため、ワイルドはこのような異なる作品を書いたのであると筆者は考える。

また、ワイルドの童話に関する初の単著であるジョラス・キリーンの*The Fairy Tales of Oscar Wilde*(2007)ではキリスト教からの影響について、アン・マーキーの*Oscar Wilde's Fairy Tales*(2015)ではアイルランド伝承からの影響について、それぞれの角度から検証されている。ワイルドの童話が研究されてこなかった理由として、教訓的なものが多い童話という文学ジャ

ンルと、「社会の危険分子」というワイルドのイメージから、彼の童話と他の作品とは無関係なものと研究者からとらえられてきたと、キリーンは注目すべき指摘をしている<sup>5</sup>。

### 3. 時代背景

19世紀末の申し子であるワイルドが、同時代の複数の思潮から大きな影響を受けていることについて述べておこう。この時代の思潮の特徴として、1. プロテスタンティズムと道徳的抑圧、2. ヘレニズムとヘブライズム、3. 子ども観の変化が挙げられる。ワイルドの童話が、唯美主義とキリスト教の相克という特異性を帯びた背景が、これらの思潮にあると筆者は考える。

ヴィクトリア時代のプロテスタンティズムは資本主義と結びつき、道徳的抑圧の原因となり、死んで地獄に落ちることへの恐怖から、イギリス人は信仰と労働を強いられていた。その一方で、高教会の教義を重視し、カトリシズムに回帰するオックスフォード運動が、ワイルドの入学したオックスフォード大学を拠点として起こっていた<sup>6</sup>。道徳的抑圧への反発が原因で、カトリシズムの様式美が多く、唯美主義者を引きつけたが、ワイルドもその一人であった。また、彼が作家として活動した時期は世紀末であったがゆえに、デカダンスやダンディズムなどが流行した。

ヴィクトリア時代に大きな影響を与えた批評家として、マシュー・アーノルド (Matthew Arnold, 1822-1888) が挙げられる。ヘレニズムとヘブライズムの相克を最初に問題提起したのはアーノルドの *Culture and Anarchy* (1869) で、ヘレニズムの思索とヘブライズムの行動という性質を対比した<sup>7</sup>。『ブリタニカ国際大百科事典』によれば、ヘレニズムとは、「古代ギリシャの文化・思想。人間中心的な合理的精神を基盤」<sup>8</sup>とし、ヘブライズムを「古代ヘブライ人の思想・文化。旧約聖書(ユダヤ教)および新約聖書の全体を含むキリスト教の精神を包含する語」とされている。アーノルドの影響は、ウォルター・ペイター (Walter Pater, 1839-1894) を通じて、ワイルドへ受け継がれていき、ワイルドにとってのヘレニズムは唯美主義に単純化され<sup>9</sup>、ヘブライズムはカトリシズムに集約されたとされている<sup>10</sup>。

ところで、三宅興子は童話と宗教の結びついた時代について、17世紀

のピューリタンの時代、ヴィクトリア朝、1930-1950年代の3つに時代区分している。ヴィクトリア時代について、「ピューリタンは、子どもは原罪をもって生まれ出たものとみたが、同じころ、ロマンチズムの思潮のなかで、子どもをイノセントで汚れのないものとみる人々も出てきた」（三宅 282）と三宅が指摘するとおり、子どもをイノセントで無垢な存在とみなす思潮が生まれた。その背景はウィリアム・ブレイク (William Blake, 1757-1827) の *Songs of Innocence and of Experience* (1794) の影響が考えられる。ブレイクが提起した「無垢と経験」は、「経験＝無垢の喪失」という普遍的なテーマへと変化し、「大人になってほしくない」というテーマを扱った *Alice's Adventures in Wonderland* (1865) や、少し時代は異なるが、「大人になりたくない」というテーマを扱った *Peter Pan and Wendy* (1911) という作品を生み出していった。児童文学史において、時代区分と宗教との結びつきは重要な枠組みであり、三宅が挙げた時代の重要性は L. H. スミスも指摘し<sup>11</sup>、童話と宗教の結びつきについて、ポール・アザールも三宅と同様の問題提起をしていることを考えれば<sup>12</sup>、三宅の区分は妥当といえるだろう。

#### 4. ワイルドの童話の技法

*Alice's Adventures in Wonderland* のように教訓性が希薄で、児童教育に対する風刺としてエンターテインメントに徹した童話<sup>13</sup> に向かわず、ワイルドの童話は民話伝承のような形式で主にヴィクトリア時代の社会に起こる不思議な出来事を描き、比喩や象徴、寓意を駆使して、「何かに喩える」ことで読者に伝えるという伝統的な技法を用いている。ワイルドの童話は擬人法を用いて、“The Happy Prince”における施しを行うつばめや、“The Star-Child” (1891) における恩返しをするうさぎのなどの動物と、外見の美しさしか理解しない人間のスノビズムを対比させることで、ヴィクトリア時代の営利主義を痛烈に批判している。*A House of Pomegranates* (1891) 以降、ワイルドは虚構的な作品を書くことがなかったため、擬人法を用いる機会はその後なかった。しかし、*Lady Windermere's Fan* (1893) や *An Ideal Husband* (1895) で描かれる「ゆすり」が同性愛の地下取引を暗に示していることや、彼が唯美主義の象徴であるひまわりを好んで身につけたことな

ど、比喩や象徴など、「何かに喩える」という技法はワイルド文学を通じて用いられたものである。

さて、ワイルドは、“The Decay of Lying” (1889) の一節と *The Picture of Dorian Gray* の序文で、リアリズムを批判し、後年の多くの作品でリアリズムを排し、現実には起こりえない荒唐無稽な物語を書いた。しかし彼の童話は、伝統的な童話にありがちなハッピー・エンドは1編しかなく、残酷な結末（いわゆるトラジック・エンディング）が多い。この点について、宮崎かすみは、「後に成功する戯曲や小説ではリアリズムを否定するのだが、他方、リアリズムを前提としない童話という形式にはあえて現実生活の無情なリアルさを導入する」（宮崎 82）と発言している。宮崎が指摘するように、反リアリズムを標榜するワイルド文学において、童話はファンタジーという非現実的性質を持ちながらも、無情な現実を描いたリアリティを持つという、相反する性質を備えている。C. S. ルイス (Clive Staples Lewis, 1898-1963) は、*An Experiment in Criticism* (1961) において、文学におけるリアリズムの定義について、論理学と形而上学の議論を区別し、「表現のリアリズム」と「内容のリアリズム」を分けて考えている<sup>14</sup>。ワイルドの童話の場合、ファンタジーという非現実的な作品だが、現実を起こりえるような「内容のリアリズム」を描いているといえる。そのリアリティゆえに、“The Devoted Friend” (1888) や “The Nightingale and the Rose” (1888) のように、最後まで自己犠牲が認められない詩的正義に反する作品や、“The Remarkable Rocket” (1888) のようにサスペンスがなく結末を迎える作品が生み出されたと考えられる。童話という形式をとりながらも、のちのワイルド文学と同様、ヴィクトリア時代の道徳的抑圧への反発という世相批判をしているのである。

また、ワイルドの童話は、ブレイクの影響に反して、「経験＝無垢の喪失」としなかった。たとえば、“The Happy Prince” において、快樂主義者であった王子は一種の死を経験して自己犠牲に目覚める。さらに庶民への施しと、つばめの死という悲しみを経験して、王子は神によって天国へと導かれる。“The Young King” (1891) においては、快樂主義者であった王が、自分のために庶民がどのような苦しみを味わっているのかを夢の中で知る。その経験を積んで回心した結果、王は神によって叙階される。このように、ワイ

ルドの童話では、経験した結果として、死や悲しみがその人間を、よりいっそう無垢で純粋な存在へと変化させるものが多い。最も顕著な例が“The Star-Child”である。美しい外見を持ちながらも、無垢であるがゆえに無知な星の子が、美しくない母親を罵倒する。その罰として星の子は醜い外見へと変貌し、その贖いの苦行を強いられる。その苦行を経験することを通じて、星の子は内面の美しさの大切さを知り、神による赦しの秘跡を受ける。“The Star-Child”では、単純に「子ども＝無垢」や「経験＝無垢の喪失」とできないことや、自己犠牲や自己処罰の結果として救済されるという複雑なテーマが潜んでいる。また、唯美主義者ワイルドが、外見の美しさのみをよしとしなかったこともこの作品の重要なメッセージである。

##### 5. ワイルドの童話の芸術至上主義

ワイルドの童話が備える芸術至上主義的要素は、芸術のために死をいとわない登場人物と、同性愛を連想させる描写が挙げられる。“The Nightingale and the Rose”では、赤いばらを欲する若者のために、ナイチンゲールが自らの血をばらの花に注ぎ込み、白いばらを赤く染め上げる。“Bitter, bitter was the pain, and wilder and wilder grew her song, for she sang of the Love that is perfected by Death, of the Love that dies not in the tomb.”<sup>15</sup>と、絶唱の果てに命尽きるナイチンゲールの姿は、芸術は命を犠牲にする価値がある<sup>16</sup>という芸術至上主義を象徴している。しかし、ナイチンゲールが一方的に共感した若者は、実際には単なる俗物であり、ナイチンゲールが命を費やしたばらの花を捨ててしまう。芸術家(ナイチンゲール)は、世間から理解されないという皮肉が効いている。また、“The Remarkable Rocket”において、自分が注目を集めるために打ち上げられることを望むロケットが、誰にも見られることなく燃え尽きる。このロケットは周囲の注目を集めようとする唯美主義者ワイルドを連想させると同時に、ワイルドが大衆には理解されないことを彼自身がなれば理解していたことが読み取れる。“The Devoted Friend”では、粉屋のヒューがかかげる「友情」という偽りの言葉にハンスは従い、最後にはヒューのせいで嵐の日に命を落とすという自己犠牲の物語である。しかし、最後までヒューの卑劣さは誰からも糾弾されず、ハンスが神に救済されることもない。ハンスのひとりよ

がりな友情は、同性愛を連想させる。

死して神に救済されるというキリスト教文学としての要素が強い“The Happy Prince”においても、芸術至上主義を連想させる描写がある。結末が近づくにつれ同性愛的な描写は増していき、越冬をあきらめて王子のもとにとどまることを決めたつばめの心理は、“[H]e [the Swallow] loved him [the prince] too well” (CW 276) と表現されている。いよいよ死期が迫ったつばめは王子の手にキスすることを希望するが、王子は、“[Y]ou must kiss me on the lips, for I love you” (CW 276) と答える。このやりとりは同性愛を連想させるエロティックな描写である。

ところで、美についての描写も、のちのワイルド文学を読むうえで重要な論点である。“The Happy Prince”では、町の市長や市議会議員、大学の美術の教授は、王子とつばめの両者の愛情と自己犠牲を理解していない。大学の美術の教授は、“As he is no longer beautiful he is no longer useful” (CW 276) と言っている。政治家や大学の美術の教授の価値観は、「美しいものが役に立つ」であったり、「実際に役に立つものでなければ価値がない」であったりという、低俗で一面的な考えである。このような実際主義や営利主義が、ヴィクトリア時代の人々の支配的な考え方であった。ワイルドはヴィクトリア時代の世相批判をしているが、外見の美しさだけが重要なわけではないということをここで主張している。既述のように内面の心の美しさを知ることで神に救済される星の子も同様であり、善行や自己犠牲の重要性をワイルドは説いている。

さて、簡潔で寓意に満ちた *The Happy Prince and Other Tales* (1888) と比べて、*A House of Pomegranate* は唯美主義色が強く、文章も装飾過多で長文の童話が多くなっている。特に、“The Young King”では苦行の描写が紙数の半分以上を、“The Fisherman and His Soul” (1891) では魂による誘惑の描写が紙数の半分以上を占めるなど、物語の本筋と直接関係がない部分で、長大で装飾された描写が前面に出るようになった。*A House of Pomegranate* に収録された作品はいずれも脇道にそれる長大な描写があり、それらは全て、異教趣味や芸術を賛美するヘレニズム的なものである。このような童話は、ワイルドの童話以外には類を見ない。*The Happy Prince and Other Tales* の作品5編にも、快樂主義や芸術を称賛するヘレニズム的な面はあったが、そ

の描写は極めて簡素であった。*The Happy Prince and Other Tales* と *A House of Pomegranate* の3年間で大きく作風と文体が変化しており、のちの彼の代表作に見られる装飾過多の文体は、*A House of Pomegranate* の時期に確立されたと考えられる。

## 6. ワイルドの童話の宗教意識

ワイルドの童話には芸術至上主義と同様に宗教意識が投影されており、キリスト教文学としての要素を備えている。9編の童話中、5編で神による救済が描かれているように、ワイルドの宗教意識が前面に出ている。神のみが人を救済しようという宗教的テーマが描かれているのが、“The Happy Prince”、“The Selfish Giant”、“The Young King”、“The Fisherman and His Soul”、“The Star-Child”の5編である。逆に言えば、神の登場しない作品はいずれも救済のない悲劇的な作品であり、詩的正義に反するものとなっている。現世で死を迎えるが、神によって天国へ導かれる“*The Happy Prince*”と“*The Selfish Giant*”のような作品もあれば、“*The Star-Child*”のように神により救済されたにもかかわらず、悲劇的な結末を迎える作品もある。ワイルドは、神による救済を童話で描いたが、その後のワイルド文学では、神による救済を明示的に描くことはなかった。

“*The Happy Prince*”は、ワイルドの童話の中でも特に宗教色が濃い。“Bring me the two most precious things in the city” (CW 277) という神の指示に対して、天使は王子の壊れた心臓と死んだつばめを神のもとに持ってくる。“As he is no longer beautiful he is no longer useful” (CW 276) という理由で王子とつばめを廃棄する美術教授と対照的である。自己犠牲の末に命を失った王子とつばめは、神によって天国という黄金の都 (city of gold) へ導かれる。キーンは、カトリシズムとオリエンタリズムの関係から、つばめの越冬がプロテスタンティズムの国イングランドからの逃走の喩えであることを指摘している<sup>17</sup>。この点をさらに検証するならば、現世でプロテスタンティズムの抑圧から解放されることは困難であり、死が現実からの救済であると読むことができる。

“*The Happy Prince*”と同様に、“*The Selfish Giant*”も宗教的な側面が強い。物語なかばで、わがままな大男を回心させる少年が登場する。終盤でその

少年には両手と両足には釘あとを二つ備えていることがわかり、この少年はキリストを連想させる。物語前半では、二人称に“you”が用いられていたが、この場面以降、“nay”や“thou”という古風な英語を用いることで、大男とこの少年とのやりとりを、ワイルドは荘重なものにしていく。年離れた大男は死の際に、この少年によって天国へ導かれ、死が新しい始まりであると読める。次男ヴィヴィアンは *The Son of Oscar Wilde* (1954) において、興味深い回想をしている。“[H]e [Oscar Wilde] had tears in his eyes when he told us the story of *The Selfish Giant*, and he replied that really beautiful things always made him cry.” (Vyvyan 53-54) とヴィヴィアンは発言しており、“*The Selfish Giant*”のような宗教的感動を与える作品を美しいと考えるキリスト教徒としての側面を、ワイルドが持っていたことがわかる。

さて、ざくろが旧約聖書にたびたび登場する植物であることから、*A House of Pomegranate* という書名をワイルドが考えた可能性を西村孝次は指摘している<sup>18</sup>。“*The Selfish Giant*”では、白い花に包まれて大男は天国へと旅立ち、“*The Fisherman and His Soul*”では、漁師と人魚の死んだ場所に咲いた白い花が、司祭達を感動させる。これらの白い花は、聖母マリアの象徴である百合であると読むことができる。作中に描かれた花の花言葉が、物語展開を暗示していると麻生えりかは指摘しているが<sup>19</sup>、それだけではなく、聖書にちなんだ花が、宗教的な場面を一層荘厳なものとしている。“*The Young King*”の戴冠の場面で白い百合を描いていることが、最もわかりやすい例である。また、作中で描かれる動物も、キリスト教の影響を受けている。たとえば、聖書の創世記30. 32-36では、羊はキリスト教徒、山羊は異教徒の喩えである。“*The Devoted Friend*”ではハンスがヒューのために追い立てるのは羊であり、ヒューの死体を発見した者や、“*The Young King*”で王を育てたのは山羊飼いである。ここで山羊が描かれているのは、ハンスの死が神に救済されぬことや、王がこの時点では神に叙階された真の王ではないことの隠喩であると読める。また、“*The Birthday of the Infanta*” (1891) では、植物が次々に侏儒を罵倒するが、侏儒のことを好きな動物は蜥蜴と鳥である。しかし、蜥蜴はイスラエルでは不浄なものであり<sup>20</sup>、聖書のマタイによる福音書6. 26では、鳥はものを考えない動物として描かれている。これは、侏儒が呪われた存在であることや、自らがそれに気づいていない

無知の隠喩である。“The Happy Prince”のつばめが、考えると眠くなるということや、“The Nightingale and the Rose”のナイチンゲールが若者から、ものを考えないという先入観を持たれていることも、聖書の影響であると読むことができる。このように、キリスト教とかかわりのある植物や動物を描くことで、ワイルドは作品の宗教色を演出していたのである。

## 7. ワイルドの童話における相克

ワイルドの童話は神による救済を描いたものが多く、ヘブライズム色が濃いキリスト教文学ととらえられることが多かった<sup>21</sup>。特にガイ・ウィロビーは、*The Happy Prince and Other Tales*と*A House of Pomegranate*の描出に、ワイルドの考える救い主キリスト像が反映されていることを指摘している<sup>22</sup>。その一方で、フラニー・モイルは、ワイルドの童話はエロティックで唯美主義的なものであり、“The Selfish Giant”にキリスト教色を付与したのはワイルドではなく妻コンスタンスであると言い切ってはばからない<sup>23</sup>。このようにワイルドの童話の解釈が分かれる原因は、ワイルドの童話が備える、芸術至上主義と宗教意識の相克が原因であると考えられる。筆者の考えによれば、カトリシズムとプロテスタンティズムの相克と、制度としてのキリスト教とワイルドの信仰心の相克が、宗教意識のサブ・テーマとして存在している。個々の童話の中にも、これらの思想が相克し、描写の濃淡が変化している。

キリスト教色が濃い作品は、“The Happy Prince”や“The Selfish Giant”、“The Young King”、“The Star-Child”であり、芸術至上主義色が濃い作品は“The Fisherman and His Soul”や“The Birthday of the Infanta”である。“The Happy Prince”や“The Selfish Giant”、“The Young King”、“The Star-Child”の結末では、神による救済が描かれているが、自分がかつて快樂主義者であったと語る王子や、外見の美しさと内面の美しさに葛藤する星の子など、作中には芸術至上主義的要素も混在している。「若い王」は、何か新しい神々の礼拝やガリー船、アラビアやペルシャなど、芸術至上主義的な異教趣味の描写が続くが、神による叙階というキリスト教的結末で終わる。また、“The Fisherman and His Soul”は漁師と人魚の異教的な愛を描いた作品だが、最後には神による祝福を連想させる描写がある。このようにワイルドの童

話は芸術至上主義と宗教意識が共存・混在している。

ところでワイルドは、“The Birthday of the Infanta”でカルヴィン派のことを「狂信的な改革派教会 (fanatics of the Reformed Church)」と批判する一方、“The Young King”と“The Star-Child”でカトリシズムの sacrament (秘跡) を描いたことから、カトリシズムを賛美しつつ、プロテスタンティズムを批判していたことが読み取れる。“The Star-Child”では、外見の美しさしか理解しない星の子が、母を罵った罰として醜い外見へと変貌する。贖罪の苦行を経て、心の美しさの大切さを悟った星の子は、「癩病やみと女乞食」<sup>24</sup>に涙を流して謝罪するが、実はその二人が両親であり、王と王妃であったことが結末で明かされる。癩病やみと女乞食が聖書を連想させる登場人物であるだけでなく、この場面ではカトリシズムの叙階の秘跡と赦しの秘跡が描かれている。プロテスタンティズムの sacrament (聖礼典) は洗礼と聖餐のみであるのに対し、カトリシズムの sacrament (秘跡) は、洗礼、堅信、聖餐、赦し、病者の塗油、叙階、結婚である。このことを考慮すれば、“The Young King”と“The Star-Child”の結末で描かれる宗教的感動はカトリシズム賛美であるといえる<sup>25</sup>。

しかし、ワイルドはカトリシズムを全面的に賛美していたわけではなく、制度としてのキリスト教については批判的であった。“The Young King”では、司教 (the Bishop) は、“Is not He who mad misery wiser than thou art?” (CW 221) と神を引き合いに出して、貧しき者に共感する王の行為を無意味であると諫める。しかし、王は神に祝福され、美しい衣と光に包まれる。神による叙階の秘跡を目の当たりにした司教は、“A greater than I hath crowned thee...” (CW 222) と、悔い改めて王の前にひざまずく。貧しき者への共感を持つ王の善行を、司教は理解しなかったが、神は王の行いをよしとしたのである。これは神の偉大さを賛美する作者の信仰心の表れであるにとどまらず、制度としてのキリスト教批判であると考えられる。“the Bishop”がプロテスタントの「主教」なのか、カトリックの「司教」なのかは作中の文章からは読み取れない<sup>26</sup>。「主教」ととらえるならば、単なるプロテスタント批判であるが、「司教」ととらえるならば、プロテスタントだけでなくカトリックも含めたヴィクトリア時代の聖職者や制度としての教会に対する批判であると解釈できる。“The Devoted Friend”においても「牧師 (clergyman)」を

批判し、ヒューの退屈な話しを教会の説教に喩えるなど、プロテスタンティズム批判と、教会批判が描かれている。“The Young King”と“The Fisherman and His Soul”は、いずれも最後に神の奇跡が起り、聖職者が心を動かされるという結末となっている。畢竟するに、ワイルドはキリスト教の教義や制度としての教会に惹かれたのではなく、神やキリストの生き方に惹かれ、童話の結末で神による救済を描いたものと考えられる。

“The Fisherman and His Soul”では、人魚との愛を成就するために、漁師は肉体と心から魂を切り離すことを迫られる。漁師はカトリックの司祭(Father)に相談するが、“The love of the body is vile”(238)と、司祭は激しい罵倒の言葉を浴びせる。ワイルドはカトリシズムに惹かれたにもかかわらず、カトリックの司祭を非寛容な人物として描写しており、制度としてのキリスト教を批判していると読める。人魚の愛と命を失った漁師は悲しみのあまり心臓が破れて死に、漁師と人魚の死体を見た司祭は、神に見捨てられた者であると呪いの言葉を述べる。3年後、漁師と人魚が死んだ場所には白い花が咲き、その美しい香りに司祭は感動の涙を流す。その後、漁師と人魚の死んだ場所には、二度と白い花が咲くことはなく、海の族もあらわれることがなかった。漁師と人魚の愛の象徴である白い花について、神に祝福されたと解釈する先行研究もあるが<sup>27</sup>、二度と白い花が咲かなかったことから、漁師と人魚は神に祝福されなかったと読むこともできる。読者によって解釈の分かれている作品であるが、鈴木ふさ子は、「この作品は愛と性を自由に謳歌するという古代ギリシア世界にみられる異教的なエロスと、厳格なキリスト教との対峙を描いた物語」(鈴木 84)と興味深い指摘をしている。筆者の考えでは、この作品はヘレニズムとヘブライズムの対峙に留まらず、二つの思想が融合した作品である。漁師と人魚の愛を呪った司祭の住む場所が祝福されただけであり、漁師と人魚の魂は神に導かれ、別の地へ向かったためである。つまり、漁師と人魚の愛の尊さは司祭には理解されなかったが、神のみが理解しており、彼らの人の道に外れたヘレニズム的な異教の愛が、神による祝福というヘブライズム的な救済を迎えている。ワイルドの童話の中で最も長く複雑な“The Fisherman and His Soul”は、芸術至上主義と宗教意識が激しく相克し、この二つの思想の両方を救済するという結末へとワイルドは昇華させているのである。

## 8. ワイルド文学における相克

ワイルドが世に出した最初の作品である *Ravenna* (1878) では、ギリシャについて言及があるものの、ヘレニズム・芸術至上主義とヘブライズム・宗教意識の相克は作品の主要素とはなっていない。対立する思想の二面性が最初に出たのは童話であり、それはのちの作品にも脈々と受け継がれていくことになった。童話においてキリスト教を賛美したワイルドだったが、唯美主義的な小説、悲劇、喜劇へと、その関心と技法は推移していった。ワイルドは芸術至上主義と宗教意識の間を行き来しており、この振れ幅の大きさが、彼の美意識の変化や、作品ごとに技法やテーマの特異性を帯びさせた原因であると筆者は考える。

まず、“The Critic as Artist” (1890) で、“Whatever, in fact, is modern in our life we owe to the Greeks. Whatever is an anachronism is due to mediævalism.” (CW 1117) とワイルドはヘレニズムを称賛している。これは、「芸術家ワイルド」らしい発言であるといえる。しかし、彼の唯美主義色の強い主張に埋もれがちだが、*De Profundis* では、キリスト教を賛美し、救いを求めている。*De Profundis* の言葉は、人生の最後にキリスト教に救いを求めた、「人間ワイルド」の発言であると考えられる。*The Picture of Dorian Gray* に登場するヘンリー卿のような逆説的な警句を発するダンディがワイルドの投影だと世間からは思われていたが、誠実な画家バジルこそが自分の考えている自分の姿であるとワイルドが書簡で告白しているように<sup>28</sup>、「芸術家ワイルド」として自己演出していた。しかし、最初期の作品を書いていた時期や、投獄後には、自己演出のない「人間ワイルド」としての潜在的な宗教意識が前面に出ている。幼少時にカトリックの洗礼を受けとされ<sup>29</sup>、死に臨んで終油の秘跡を受けたワイルドの人生において、ヘブライズムは最も長期間影響を与えた思想であったためである。

童話以降のワイルド文学においても、芸術至上主義と宗教意識の相克は主要素である。*The Picture of Dorian Gray* は唯美主義や墮落の象徴のようにとらえられてきたが、前半はドリアンの墮落を描いた唯美主義文学だが、後半はドリアンの地獄墜ちを描いたキリスト教文学と読むことができる。ドリアンが悔恨する場面で、プロテスタンティズムに対して、“to save it [life] from that harsh, uncomely puritanism that is having, in our own day, its curious

revival...”(CW 99)と辛辣な発言をしている。また、プロテスタンティズムの教義だけでなく、“[I]n the Church they [the successful men] don't think. A bishop keeps on saying at the age of eighty what he was told to say when he was a boy of eighteen.”(CW 19)と、主教に対してもドリアンは批判的である。その一方で、ドリアンはカトリックへの改宗を逡巡し、蒐集品に「聖母マリア (the Virgin)」<sup>30</sup>に関するものがあるなど、カトリシズムに惹かれたワイルドの思想がドリアンに投影されている。墮落したドリアンを嫌ったバジルは、出会った頃のドリアン、汚れなき内面の美しさを崇拝していたというのも注目すべき点である。依然として若さと美しさを保ったドリアンをバジルが嫌い、最後にドリアンが芸術とかけ離れた姿で死なねばならなかったことは、ワイルドが重視する美とは何であったかを示している。“The Happy Prince”や“The Star-Child”で描かれた、内面の美しさをよしとする思想が、*The Picture of Dorian Gray*でも受け継がれているのである。

*Salomé*も*The Picture of Dorian Gray*と同様、猟奇的で唯美主義色の濃いヘレニズム的な作品ととらえられることがこれまで多かった。しかし、猟奇的な行為の末にサロメが処刑される結末は、人間の小ささや愚かさ、神の存在を陰画的に描いていると読める。また、聖書では母ヘロデアに唆されてヨカナーンの首を所望したサロメであるが、ワイルドの*Salomé*ではこの点について大きな改変がなされている。ヨカナンに対するサロメの世俗的な思慕の念と、サロメを罵倒するヨカナンへの世俗的な反発が交錯し、サロメが自らの意思でヨカナンを処刑して口づけするという唯美主義的な戯曲へとワイルドは仕立て上げた。しかし預言者ヨカナンを殺したことへの罪悪感と、サロメの狂気への恐れから、父ヘロデはサロメを処刑するという場面で終わる。つまり、神からの罰を恐れるヘロデがサロメを裁くというヘブライズムの勝利を描いていると解釈することができる。唯美主義者ワイルドの代表作である*Salomé*にも、神を賛美する側面が潜んでいたのである。

*The Picture of Dorian Gray*や*Salomé*の作品で前面に出ている唯美主義色は、ワイルドの人物像と合致するが、これらの作品の根底においても濃淡の差はあれども、彼のキリスト教信仰が潜んでいる。快樂の限りを尽くしたドリアンは罪の意識に苦しみ、醜い最期をとげるが、*The Picture of Dorian*

Grayの終わりは、*Salomé*の始まりであるとフィリップ・コーヘンは指摘している<sup>31</sup>。ドリアンの後半の苦悩とヘロデの苦悩は、神からの罰を恐れるという同種のものであり、唯美主義色の極めて濃い、ワイルドの代表作と言われているこの二作において、はからずも彼の潜在的な宗教意識が描かれている。また、*De Profundis*においてワイルドは、カトリシズムを賛美し、制度としてのキリスト教を批判しつつも、ギリシャ精神を賛美しており、ワイルドの相克は最晩年の作品まで続いていたことがわかる。唯美主義文学ととらえられている、童話以降のワイルド文学もまた、表現方法は異なれど、陰画的に神の存在を示すキリスト教文学ととらえることができる。すなわち、神による救済を描いた童話はキリスト教文学としてのワイルドの原点であり、作品ごとに濃淡を変えていった芸術至上主義と宗教意識の相克が最初に顕著となった作品である。

## 9. 結論

子どもへの教訓性やエンターテインメントを主題とした伝統的な童話と異なり、芸術至上主義と宗教意識の相克を主題としたワイルドの童話は、特異な作品であった。ワイルドの童話は、「子どものための本」であるだけではなかった。“The Happy Prince”について、“not for children, but for childlike people from eighteen to eighty....”<sup>32</sup>とワイルドが発言しているように、その童話は「子どものための本」であるだけでなく、「大人のための本」でもあり、彼自身の思想が投影された「作者のための本」でもある<sup>33</sup>。プロテスタンティズムへの反発やカトリシズムへの憧憬、同性愛的描写といった自己開示や自己慰撫、自己処罰としての作品であると読むことができる。

唯美主義を信奉した「芸術家ワイルド」であったが、時代によって唯美主義やキリスト教的描出の濃淡は変化しながらも、作品の根底には宗教意識が潜んでいた。唯美主義を賛美する戯曲や小説だけでなく、童話のような宗教的感動を与える作品も、ワイルドに潜む複数の自己の一面である。ワイルドの童話は、のちの作品にも見られる技法や主題といった萌芽を持ちつつ、芸術至上主義と宗教意識が相克した結果、「人間ワイルド」の宗教意識が前面に出た、ワイルド文学における最初の作品である。童話で初めて表出した芸術至上主義と宗教意識の相克と、キリスト教的描出は、の

ちのワイルド文学総体に組み込まれていったのである。

註

- 1 本稿では、『世界大百科事典第2版』の定義に従い、芸術至上主義は1820年代からの、「芸術は社会性、倫理その他のなにもものにも拘束されず、それ自身のために存在するという思想」とし、唯美主義は1860年代からの、「作品の価値はそこに盛られた思想あるいはメッセージではなく形態と色彩の美にある」という思想とする。すなわち、唯美主義は芸術至上主義の一派であり、1860年代から流行した芸術思潮として扱う。
- 2 池田正義「オスカーワイルドにおける異教観と基督教観」『時事英語学研究』7、日本時事英語学会、1968年、62-63。
- 3 シャルル・デュ・ボス (Charles Du Bos, 1882-1939)、ハインリッヒ・ベル (Heinrich Theodor Böll, 1917-1985)、佐古純一郎、山形和美らは主体論の立場をとっている。T. S. エリオット (T. S. Eliot, 1888-1965)、リーランド・ライケン (Leland Ryken, 1942-) らは、書き手や目的などの前提を置きながらも、素材論の立場をとっている。
- 4 小玉晃一「キリスト教文学を解く——歴史・受容史・概論」安森敏隆、吉海直人、杉野徹編『キリスト教文学を学ぶ人のために』世界思想社、2002年、18。
- 5 Killeen, Jarlath. *The Fairy Tales of Oscar Wilde*. Hampshire: Ashgate Publishing, 2007, 1.
- 6 塚田理『イングランドの宗教』教文館、2004年、307。
- 7 アーノルド、マシュー (多田英次訳)『教養と無秩序』岩波文庫、2015年、161-162。
- 8 本稿における、引用文中の「ギリシャ」と「ギリシア」の文字のゆらぎは、原文を尊重した。
- 9 遠藤光「ヘレニズム」山田勝編『オスカー・ワイルド事典——イギリス世紀末大百科』北星堂書店、1997年、364。
- 10 酒井敏「カトリック」山田勝編『オスカー・ワイルド事典——イギリス世紀末大百科』、84。
- 11 スミス、L. H. (石井桃子、瀬田貞二、渡辺茂男訳)『児童文学論』岩波書店、1964年、19-36。
- 12 アザール、ポール (矢崎源九郎、横山正夫訳)『大人・子ども・本』紀伊国屋書店、1957年、188-210。
- 13 コーエン、モートン (高橋康也、佐藤容子、安達まみ、三村明訳)『ルイス・キャロル伝』上、河出書房新社、1999年、249-250。
- 14 Lewis, C. S.. *An Experiment in Criticism*. Cambridge: Cambridge University Press, 1961, 57.
- 15 Wilde, Oscar. *Complete Works of Oscar Wilde*. London: HarperCollins Publishers,

- 2003, 218. ワイルドの著作からの引用はCWと略記し、その後にページ数を付す。
- 16 鈴木ふさ子『オスカー・ワイルドの曖昧性』開文社出版、2005年、181-183。
- 17 Killeen, Jarlath. *The Fairy Tales of Oscar Wilde*. Hampshire: Ashgate Publishing, 2007, 37.
- 18 西村孝次「あとがき」ワイルド、オスカー（西村孝次訳）『幸福な王子』新潮文庫、1993年、231。
- 19 麻生えりか「見たこともない白い花」『オスカー・ワイルド研究』14、日本ワイルド協会、2015年、26-27。“The Selfish giant”と“Fisherman and His Soul”では花言葉をあえてワイルドが用いておらず、人間が花の名前や花言葉で序列を作っていることにワイルドが意義を唱えている可能性を、麻生は指摘している。
- 20 スミス、ウィリアム（小森厚、藤本時男訳）『聖書動物大事典』図書刊行会、2002年、250。
- 21 遠藤光「ヘブライズム」山田勝編『オスカー・ワイルド事典——イギリス世紀末大百科』、359。
- 22 Willoughby, Guy. *Art and Christhood — The Aesthetics of Oscar Wilde*. London: Associated University Press, 1993, 15-18.
- 23 モイル、フラニー（那須省一訳）『オスカー・ワイルドの妻コンスタンス——愛と哀しみの生涯』書肆侃侃房、2014年、218。
- 24 この表現は、新潮文庫の西村孝次訳に従った。
- 25 徳善義和、百瀬文晃編『カトリックとプロテスタント——どこが同じで、どこが違うか』教文館、1998年、151-161。
- 26 新潮文庫の西村孝次訳、光文社古典新訳文庫の小尾美佐訳とも、「司教」と訳している。
- 27 大淵利春「オスカー・ワイルド研究2」、『駒澤大學外国語部論集』60、駒澤大學外国語部、2004年、89。
- 28 Holland, Vyvyan, ed. *Oscar Wilde: A Life in Letters*. New York: Carrol & Graf Publishers, 2007, 170.
- 29 Tucker, Jeffery A. “Oscar Wilde, Roman Catholic”, 2001.  
<http://www.catholiceducation.org/en/culture/literature/oscar-wilde-roman-catholic.html>（閲覧日：2017年9月3日）
- 30 マリアを聖母とみなすのはカトリシズムの教義であり、プロテスタンティズムではマリアは原罪を背負った人間であるとみなしている。
- 31 Cohen, K. Philip. *The Moral Vision of Oscar Wilde*. London: Associated University Press, 1978, 153.
- 32 Holland, Merlin & Hart-Davis, Rupert, ed. *The Complete Letters of Oscar Wilde*. New York: Henry Holt and Company, 2000, 388.
- 33 A・A・ミルン（Alan Alexander Milne, 1882-1956）やパメラ・トラバース（Pamela

Lyndon Travers, 1899-1996) は、自分のために童話を書いていると発言している。

引用文献

Holland, Vyvyan. *The Son of Oscar Wilde*. New York: Carol & Graf Publishers. 1954.

兒玉實英「キリスト教と文学とのかかわり」安森敏隆、吉海直人、杉野徹編『キリスト教文学を学ぶ人のために』世界思想社、2009年。

鈴木ふさ子『三島由紀夫——悪の華へ』アーツアンドクラフツ、2015年。

富士川義之「愛他精神とデカダンス」『オスカー・ワイルドの世界』開文社出版、2013年。

三宅興子『イギリス児童文学論』翰林書房、1993年。

宮崎かすみ『オスカー・ワイルド——「犯罪者」にして芸術家』中公新書、2013年。

『ブリタニカ国際大百科事典小項目版2015 DVD-ROM』ブリタニカ・ジャパン、2015年。